

10973歩

六牡丹

10973歩。

これが僕に与えられた長さだ。多いのか少ないのかわからないけれど、僕は歩くしかない。一步踏み出すと記憶の底から懐かしい景色がふわりと浮かぶ。モノクロームだった景色が徐々に色彩を帯び、もっとも鮮やかな一瞬を見せた後、やがて柔らかな砂のように形を崩し、風に流されるように消えていく。

8909歩目。

君が現れた。

「山中と言います。よろしくおねがいします」

「あ、浦川です。よろしくおねがいします」

君は少し照れたように微笑んで小さく頭を下げた。

「じゃあまず1日の流れから教えるね」

「はい」

君はポケットからメモ帳を取り出し、僕の言うことを一生懸命書き込んでいた。やや緊張気味の君に冗談を言った時、可愛らしく儂い笑顔を見せてくれた。

君と僕の人生が交差した一枚の絵が、サラサラと流されて行く。

8924歩。

「どうしたの？」

君は少し肩を落としていた。

「ちょっと失敗しちゃいまして、怒られました」

「ああ、そうなんだ。大丈夫だよ、最初は失敗するものだから。俺も同じ失敗した事あるし。失敗しなきゃ覚えられないこともあるからね」

君は「はい」と力なく返事をして仕事を続けていた。

8926歩。

僕は君にメールアドレスを教えてもらった。

「あのさ、メールアドレス教えてくれない？」

僕はドギマギして聞いたけど、君は「いいですよ」と何の抵抗も無く教えてくれた。

8976歩。

なんとなく君の笑顔が見たくて小さなバラの形をしたチョコレートを注文した。

9013歩。

寝付けずにベッドで何度も寝返りをうった。目を閉じると心の中にあるモヤモヤした感情が眠りを妨げる。

君の笑顔がとても遠く感じ、不安になった。

そうだった。この夜は本当に眠れなくて、朝方ようやく眠ることができたんだった。

9014歩。

僕は君にチョコレートを渡した。

「はい、逆チョコ」

君は驚いた顔をしたけどすぐに笑顔になって受け取ってくれた。

「ありがとうございます」

地面には薄っすらと雪が積もっていた。

その日の夜、携帯電話がメールの着信を告げた。ディスプレイには君の名前が表示されていて僕はドキドキしながらメールを開いた。

今日はチョコレートありがとうございました！

逆チョコって初めてもらったのですごく驚きました。

家に帰って中を見たら素敵なチョコレートで食べるのがもったいないくらいでした。

でもちゃんと食べましたよ(笑)

とても美味しかったです。

本当にありがとうございました！

僕も逆チョコなんて初めてだった。

9082歩。

「おはようございます！」

「おはよう」

「桜満開になりましたね」

道路向かえにある小学校の桜が綺麗に咲いていた。

「うん。ようやく春って雰囲気になったね」

「でもあっという間に散ってしまうんですね」

桜を見つめる君の横顔がなんとなく寂しそうに見えた。

「まあね...、今度お花見しようか？」

「え？みんなですか？」

「いや、二人で」

君が「え？」と口を開ける。

「デートですか？」

「うん、だめ？」

少しの沈黙。

今こうして見ればその沈黙は1秒も無かったんだけど、あの時はとても長く感じた。

「いいですよ」

恥ずかしそうに微笑んだ君に、僕は嬉しさを誤魔化そうとしてわざとらしくガッツポーズをした。

「やったぜ！」

その姿を見て「あはは」と口を抑えて君は笑っていた。

9085歩。

桜が満開のうちにと早速お互いのスケジュールを合わせデートをした。

待ち合わせ場所で君を車に乗せてエンジンをかける。セットしていたCDが流れると君は「あっ」と僕を見た。以前君が好きだと言っていたアーティストの曲が流れたからだ。

「この曲、良いですよね」

君が微笑む。地元で有名な桜並木道まで束の間のドライブ。君といる空間はとても楽しかった。

駐車場に車を止め、春の空で目一杯花を開いた桜の木々の下をゆっくりと歩いた。

君の歩く少し先で、僕は肩に下げた一眼レフで桜の写真を撮った。

桜並木道の半分ほどまで歩いた時、振り返って君に言った。

「写真撮ってもいい？」

「えっ」

カメラを構えファインダーを覗き、君と桜を枠に入れる。君はそっと笑顔になり桜の木にコツンと頭を寄せた。すうっと吹いてきた風で数枚の桜の花が舞い降り、君は顔にかかった髪を掻きあげた。僕はその一瞬の場面を「チーズ」とも「撮るよ」とも言わず、シャッターを切った。

「最高！」

親指を立てると君はタタタと駆け寄ってきた。

「見せてください」

データを呼び出し、青とピンクと君で切り取られた風景をモニターに映す。

「わぁ」

しばらく眺めていた君は「うん」と頷いた。

「写真、上手ですね」

「被写体が良いんだよ」

「桜が、ですか？」

モニターを見ていた僕の顔をチラリと見る。

「桜、も」

強調すると君は少し顔を赤くして「ありがとうございます」と微笑んだ。

その微笑みが凄く素敵だった。一番撮りたかった一瞬だった。SDカードには残すことができ

なかったけど、僕の記憶にははっきりと記録されている。

その後、僕は君にも桜にもカメラを構えることはなかった。ただゆっくりと君と歩いていることがとても幸せだと感じた。

たっぷりと歩き、車に戻る。

「どうぞ、お姫様」

助手席のドアを開けてふざけた様子で差し伸べた僕の手を、君はいつもの照れた笑みを浮かべてそっと触れた。少し冷たい手の感触が、僕の心を暖かくした。

車を運転しながら会話をしていると、君がとても儚く感じた。初冬の池に張った薄い薄い、手で触れると溶けて消えてしまう氷のようだった。

そうなんだよ。この時、僕気持ちはどうしようもなくなったんだ。

「じゃあまたね」

君が車から降りてドアを閉めた。

「はい。ありがとうございました！」

またデートできるかな？僕は心の中で何度も呟いたけれど、声になることはなく、春風に吹かれて消えていった。

9086歩。

眠れない。

目を閉じると君が次々と現れて眠りを妨げる。

でもそんな君を抱きしめて、夢に堕ちて行きたいと思った。

桜の花びらに染まる君が消えない。

9093歩。

「わぁ、かわいい」

「でも餌を食べる姿は怖いんだよ」

クリオネがパタパタと手を動かし水中を漂っている。

その日の水族館は混雑していた。人混みを掻き分けるように館内を移動する時、僕は君の手を握った。君は自然に繋いでくれたけれど、一度離してしまったらもう繋ぐ事が出来ないような気がして、いつまでも握っていた。

「好き」

君の動きがピタリと止まった。

「クリオネじゃなくて」

手をギュッと握りしめ、君を見た。

君は少しうつむいた後、コクンと首を下げて僕の手を強く握り返した。

「やっと言ってくれましたね」

水槽の明かりが、微笑んだ君の顔を照らした。

「待っていたんですよ」

僕は「ごめんね」と言い、「お待たせしました」と加えた。

「私も好きです」

君の家の前で車を止め、僕は君を引き寄せてキスをした。手を回した小さな肩はとても華奢で今にも壊れそうだった。だからこそ、もっともっと大切にしたいと思った。

9133歩。

「誕生日おめでとうございます」

家に帰って包みを開けると一切れのショートケーキが入っていた。「ありがとう。今から食べます」とメールを打ち、ケーキの写真を撮って君に送信した。食べるのが凄くもったいなかった

んだけど、一口一口丁寧に味わって食べた。
来年は一緒に食べようね。

9171歩。

暑い日差しの中、君と浜辺にいた。
白いワンピースからスラリと伸びる肌を日傘で守り、あてもなく歩いた。
水平線を眺めると、僕らの未来がどこまでも広がっているような気がした。
君は足元の貝殻を拾い太陽に照らす。眩しそうな目をした君が綺麗だった。

9199歩。

神社の鳥居の前で君は待っていた。
水色の浴衣を着て髪を上げた姿がとても可愛らしく、危げで、早く守ってあげたいと思った。
僕は急いで駆け寄る。
「ごめん、おまたせ」
君は「ううん」と首を振り、君から手を握ってきた。
露店を一つ一つ楽しんでいるうちに日が暮れて、花火が上がった。
ズドンとなる度に君の顔が花火の色に染まり、微かな笑みが見える。
繋いでいた手はいつまでも離さず、花火が終わると僕らはそっとキスをした。

9223歩。

小さく震えている体を抱き寄せた。僕の胸におでこをくっつけて君は細い呼吸を繰り返す。君の震えが止まるまで、長い時間丁寧に包み込んだ。
やがて君は僕を見上げるとそっと笑った。おでこにキスをして、目を閉じた君の唇にキスをして、首筋にキスをする。君はもう震えてはいなかった。そっと体のラインをゆっくりとなぞり、少しずつ君と溶けていく。互いの存在を確かめ合い、感じ合いながら、僕らは体の全てを合わせた。

9300歩。

ファミレスで君に渡した箱の中にはペアのネックレスが入っていた。君はそれを見ると凄く喜んで箱を持って席を立った。数分後に戻ってきた君の首には薄いピンク色をした半分のハートが輝いていた。君のためだけに作られたように、君の体の一部のように、君の魅力がギュッとその一点に集まっているように綺麗だった。
「はい、こっちつけてください」
渡されたもう半分のハートを僕はその場でつけた。

この時は、ちょっと照れくさかったな。

9328歩。

初めて君と過ごすクリスマスイブ。
少しの残業を終わらせて外に出ると、今朝の予報通り雪が降っていた。
車に乗り「今から行くね」と君にメールを送る。
道路には軽く雪が積もっており、ゆっくりと車を走らせた。信号待ちで横を見る。クリスマスに染まった歩道を楽しそうに歩く人々の姿。プレゼントを持った男の子。点灯するネオン。サンタの帽子をかぶって雪かきをしている店員。
早く君に逢いたい。

ようやく君の家に着いた時、すぐに玄関の灯りが点いて君が出てきた。滑らないようにそっと、でもどこかワクワクした足取りで車に近づく君。僕は車を降りて助手席のドアを開けた。
「遅くなってごめんね」
君は首を軽く振る。

「逢えればいいんです」
肩についた雪をパシパシと払い、君は助手席に乗った。

「逢えればいいんです」
この言葉、凄く嬉しかった。

小洒落たイタリアンレストランでパスタを食べ、街を歩いた。僕は手が冷たくて息を吹きかけると、君は「はい」と手袋を差し出した。白くフワフワした片方の手袋。君の手を見ると左手だけが手袋に包まれていた。

「右手、寒くなるじゃん」
手袋を返そうとすると

「いいんです」
と君は言い、温もりを失った右手で僕の左手を握った。

「こうすれば温かいですから」
僕は右手に手袋をはめた。手袋はちょっと長めの紐で繋がっていたけど、不自由さはなかった。君の左手と僕の右手、君の右手と僕の左手、4つの手が繋がっていることが、何よりも温かかった。

「先月、ネックレスをもらいましたから」
君はクリスマスプレゼントは要らないと言った。

「じゃあケーキだけでも買って帰ろうよ」
少し先にあるケーキ屋さんの看板を指差した。

店内に入ると可愛らしいケーキが沢山並んでいて、それらを見るなり君の表情が華やぐ。色々な種類を食べたかったのでカットケーキを何種類か買って2人で分けあって食べることにした。

チョコ生ケーキ、モンブラン、いちごのタルト、ブルーベリーのタルト、ミルフィーユにミルクレープ。6種類選び箱に入れてもらう。

「食べ切れますかね？」
「うん、なんとか食べるよ」

車に戻る途中、真っ白な光を放つショーウィンドウの前で君は足を止めた。
大きなガラスの中に飾られていたのは、光に負けないくらい真っ白なウェディングドレスだった。

「きれいですね」
「うん」

僕はドレスに見惚れた。君が着た姿を想像し、バージンロードを歩く姿を想像し、愛を誓う場面を想像した。

「いつか着せてくださいね」
僕に顔を向けてニコリと笑い、君は歩き出した。少し、早歩きの君。僕はその後ろ姿を見て「もちろん」と心で頷き、もう一度ショーウィンドウに目をやった。

きっと着せてあげるから。

9339歩。

ちょっと遅目の初詣。足元に気をつけながら境内の階段をゆっくりと登った。

お賽銭を入れて鈴をガランガランとならす。

目を閉じて僕は願った。これからもずっと君と一緒にいれるように。

顔を上げて隣を見ると、君はまだ手を合わせていた。何度も何度も強く強く願っているように見えた。

階段を下りながら君に、何を願ったのかを聞いた。

「秘密です」

君ははにかんだ。僕は君の願いが気になってしまって、聞きたくて聞きたくてモヤモヤした。

「山中さんは何を願いましたか？」

「ひ、み、つ」

負けじと返答すると君はふふっと笑った。

「でも」

一段一段降りていく足元を見ながら君は言った。

「でも、きっと同じですよ。私たちが願ったことは」

僕は君の手をギュッと握りしめた。

9380歩。

箱を開けるとハートの形をしたチョコレートが並んでいて、その横に手紙が入っていた。

「料理は得意じゃないんですけど思い切って手作りにチャレンジしてみました。甘さは控えめにしたつもりです。初詣の日、「山中さんとずっと一緒にいられるように」って願いました。今、とても幸せです。本当にありがとうございます。」

何度も読み返した後、丁寧に畳んでテーブルの上に置いた。右端のチョコレートを摘んで口にすると、甘さを抑えたカカオの風味が広がった。一気に食べるのがもったいなくて、一つ一つゆっくりと食べながら、ホワイトデーは僕も手紙を書こうと思った。

9444歩。

桜を見上げた。一年前の君の姿が浮かぶ。あっと言う間に過ぎた一年だったけれど、君の存在が一瞬一瞬を大切なものにした。

「去年、本当は凄く緊張していたんだ」

「私もですよ」

「緊張していたから、去年の記憶があまり無いんだよ」

君は笑った。

「写真撮ったのは覚えているけどね」

「うん。私も覚えています。ちょっと恥ずかしかった」

今日はカメラを持ってこなかった。二人でゆっくりと桜並木道を歩きたかったから。

桜を眺めて

「綺麗ですね」

と言い、散歩している子犬を見て

「わあ可愛い」

と言い、キラキラと光る川を見て

「眩しいですね」

と言う。

そんな自分自身に素直な君が、とても好きだった。

9602歩。

「今度さ、親に会ってほしいんだけど」

僕の言葉に君は戸惑った。その戸惑いは否定からくるものではなく、不安からくるものに見えた。

「ちょっと不安？」

「うーん。不安、なのかな」

「堅苦しいものじゃなくて、今この人とお付き合いしていますよ。って紹介するだけだからさ」

君はフォークを置き考える。

「大丈夫ですかね？」

首を傾げて照れ笑いをした。

「大丈夫だよ。今のうちに慣れておいたほうがいいでしょ」

慣れておいた方がいいという言葉に反応したのか、君はクスクスと笑った。

「はい、わかりました。頑張ります」

「じゃあ後でいつにするか考えよう」

頷いた君は再びフォークを手に取った。

9665歩。

助手席に乗った君はこれまで見たことが無いくらい緊張していた。チラチラと横目で見ると、頻繁に深呼吸を繰り返しているのが見えた。僕はなんだか可笑しくなって声をかけた。

「緊張しまくってる？」

僕が笑っているのを見た君は

「緊張しますよー」

と言い何度目かの深呼吸をした。

「山中さんの両親ってどんな感じですか？」

エンジン音に消されそうな小さな声で言う。

「結構怖いよ」

「ちょっとやめてくださいよ」

「嘘だよ。滅多に怒らないし、こういうことに関してはしっかりと認めてくれるから」

「だと良いんだけどな...」

零れるように言って君は目を閉じた。

この時の君は本当に緊張していたよね。結果的に両親は君が思っている以上に暖かく迎え入れてくれて、会話をしていくうちに君はいつもの笑顔を取り戻していた。あの緊張はなんだったんだろうって思うくらい、君らしい笑顔だった。

ね、怖くなかったでしょ？

あの後、両親は君のことを「良い子だね」って言っていたよ。「あの子を泣かせるなよ」とも

。

9779歩。

僕は部屋のソファに寝転がり通帳を見ている。

3から始まる7桁の数字が記されている。

君には言わなかったけれど、いつか訪れるかもしれない「その日」のために、君と出逢う前からコツコツと貯めていた。君と出逢ってから意識して多めに貯めていた。

もう、不安はない。

9823歩。

公園のベンチに座り夕日を見ていた。ピタリと寄り添う僕らを西日が照らしている。

僕は君の手にそっと触れ、「あのさ」と呟いた。

その声に反応し僕の方へ顔を向けた君と目を合わせる。一つ深呼吸をした。

「結婚しよう」

君の眉がピクリと動き目線が下がった。少しの沈黙が僕らを包む。サラリと風が吹き、俯いた君の髪がなびいた。

君の目線が再び僕の目を捉えたとき、君の頬には涙があった。

「はい」

こくりと頷くと、涙は頬から流れ落ち西日でキラリと輝きながらポタリと僕の手の甲に落ちた

。

その手で君を引き寄せると君は顔を僕の胸に押し付けた。

鼻を嚙りながら小さく震えている君をずっと抱きしめていた。

「ありがとうございます」

夕日が沈む頃、君は言った。

9870歩。

まだ何も書かれていない婚姻届を机にしまい、僕は家を出た。

昼過ぎに東京へ着き、予約していたホテルに入ると部屋のベッドに寝転んだ。

「無事東京に着いたよ」

君にメールを送る。この一週間の出張から帰ったら、婚姻届を君のもとへ持って行こうと思った。

9878歩。

新幹線から降りるとようやく仕事を終えた気持ちになった。東京はどこか皆忙しそうで、街中にいるだけで体力が失われていくようだった。

僕は自動販売機でコーラを買い車に乗り込んだ。

帰る途中で君の家に寄ると「おつかれさまでした」と出迎えてくれた。お土産を手渡す。

「明日、婚姻届持ってくるから」

「うん。一緒に書こうね」

パッと華やいだ笑顔が疲れを癒してくれる。

「じゃあまた明日」

手を振る君をバックミラー越しに見てクラクションを短く鳴らし車を走らせた。

君の家から離れると、急に疲れが戻ってきた。

帰ったら早く寝よう。僕は少しだけ車のスピードを上げた。

そして、あの一秒に出遭った。

9879歩。

君が泣いている。

立つことも出来なくなった体を両親に支えられ、君は泣いている。

なんで。どうして。

もしコーラを買っていなければ。

もし君の家に寄っていなければ。

もしスピードを上げていなければ。

僕はあの一秒に出遭うことはなかった。

「私も連れて行って」

君は叫んだ。

お母さんに抱きしめられるとより一層大きく泣いた。

色んな人がいる部屋で、君の泣き声だけが響き渡った。

9880歩。

僕の母に渡された、真っ白な婚姻届に大粒の涙が落ちる。

一晩中泣いても、枯れることなく溢れてくる涙。

写真の僕は、ずっと笑っている。

9890歩。

ベッドに転がる君がいる。

食欲もなく、疲れ果て、携帯電話を見ては涙ぐむ。

両親の声も、友だちの声も、君には届かない。

9902歩。

あの日から初めて君は笑った。

本当に小さな微笑みだけれど、それは大きな一歩だった。

9903歩、9904歩、9905歩...9999歩。

僕は歩く。

君はまだ悲しい顔をしているけれど、笑顔を見せることが少しずつ増えてきた。

大丈夫、きっと大丈夫だから。

10000歩、10001歩、10002歩。

ゆっくりと歩き始めた君の歩幅に合わせてながら僕も歩く。

10053歩。

初雪。

クローゼットから白い手袋を取り出した君は、不意に涙を浮かべた。

僕も思い出している。あの日に繋いだ手の暖かさと、君の笑顔を。

君の胸は、まだまだ痛んでいるけれど、君がまた君らしく笑えるようになるまで、僕は見守っているから。

ね？歩こう。

10054歩...10079歩...10105歩...。

俯いたり、見上げたり、首を傾げたり、微笑んだり。

強くなっていく君の足取りが、とても嬉しい。

僕のいない世界を、しっかりと歩き始めた君。
行方を見ているだけで楽しくて、気がつくところなのに歩いていた。
10683歩って。

10721歩。
君は悩んでいる。

「良い人じゃん」
僕は呟いた。

10725歩。
まだ君は悩んでいる。

10730歩。
君はネックレスを外した。

うん、それでいいんだよ。

10731歩。
新しい君の人生が始まった。
懐かしい笑顔。僕はもう少し楽しませてもらう。

10973歩。
あれから3年が経った。
君は僕のお墓の前にいる。
「こんにちは」
笑顔の君。手には花束や線香を持っている。

「3年経ちましたね」
赤や黄色の花を供えながら、君は語りかける。その表情はとても暖かで、もうあの頃のような
悲しみはなかった。

君はポケットから取り出したネックレスをお墓にゆっくりと置き、太陽の光でキラキラと輝く
それを優しい目をして見つめた。小鳥たちのさえずりが聞こえる中で、長い時間そうしていた。

ふいに口元がピクリと動いたかと思うと、優しくった目に涙が溜まり始めた。でも君は負けな
いように、口元をキュッと引き締めて涙を拭い、深呼吸をした。

用意していた線香に火を付けてお墓に供えると君は空を見上げた。

「見ていますか？」

太陽が顔を照らす。

笑顔が見えた。

なによりも大切にした、あの笑顔が見えた。

あの頃よりも、ずっとずっと綺麗になった笑顔だった。

君はお墓に向き直り、手を合わせて目を閉じた。

3回ほど呼吸の後、小さく口が動いた。

「大切な人ができました」

僕はクスッと笑った。

「うん、知っているよ」

「でも、絶対忘れませんからね。山中さんとの日々を」

きっと君は笑顔で僕を思い出す。もう、悲しい顔はしない。

君は立ち上がり小さく笑った。

「また来ますね」

「またね」

僕が軽く手を振るとそれに反応したかのように景色がサラサラと風に流されるように消えていった。

360度、真っ白な空間が僕を包む。不思議とその空間は心地よく一切の不安は無かった。

「ああ、終わったんだな」

僕は何故か分かった。きっとこれが終わるといふことなのだろう。

目を閉じると上の方から強い光を感じ、その場所に引かれるように身体が浮かび上がる気がした。

薄いレース生地のようなものに包まれる。僕はとても懐かしい気持ちになった。

ああ、これは君の香りだ。

「ありがとう」

僕は呟いた。

君に逢えて僕は幸せだった。

君は君の幸せをこれからたくさん育てて、たくさん笑ってほしい。
時には涙に暮れる日もあるかもしれない。
だけどその涙はきっと、次の笑顔のための大切な種になるから。

僕の体は少しずつ色を失っていく。

もし最後に君に声を届けることができるなら、やっぱり
「ありがとう」
かな。

君はふと振り返り、空を見た。
その時僕ははっきりと聞こえた。

君からの

「ありがとう」

完